

## ドイツ啓蒙主義の日本像に関する各種文献の翻訳(後編)

— 「人間性の探求」と「異文化理解」の事例研究のために —

宮島光志, 中澤 武<sup>※</sup>, 中澤孝子<sup>※</sup>, 寺田俊郎<sup>※※</sup>

医学科 国際社会医学講座・医療人文学領域

## Eine Übersetzung der verschiedenen Texte über das Japanbild der deutschen Aufklärung (Zweite Hälfte)

— Zu Fallstudien der "Humanitätsforschung" und des "interkulturellen Verstehens" —

MIYAJIMA, Mitsushi, NAKAZAWA, Takeshi<sup>※</sup>, NAKAZAWA, Takako<sup>※</sup> und TERADA, Toshiro<sup>※※</sup>

Abteilung der internationalen Sozialwissenschaften (Bereich der Humanitätsforschung), Medizinische Fakultät

## Zusammenfassung :

In der vorliegenden zweiten Hälfte dieser Arbeit werden weitere verschiedene Texte über das Japanbild der deutschen Mittel- und Spätaufklärung übersetzt und erläutert. D.h.; III. *Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und zu Lande* usw. Bd.21 (1753) (eine Fortsetzung der ersten Hälfte), IV. Johann Georg Zimmermann, *Von dem Nationalstolze* (1766), V-1. Johann Gottfried Herder, *Ueber Erkennen und Empfinden in der menschlichen Seele* (1774), und V-2. Ders., *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* (1884-91). Durch diese Übersetzung werden Materialien für gründliche Forschungen über die Gestaltung des historischen Japanbild in Deutschland bereichert. Für die "Humanitätsforschung" und das "interkulturelle Verstehen" scheinen einerseits Zimmermanns psychoanalytische Kritik an der japanischen Nationalstolz und andererseits Herders klimatologischer Vergleich zwischen Japan und China als exemplarischer Versuch noch heute von größerer Bedeutung.

**Schlüsselwörter** : die deutsche Aufklärung, Japanbild, Kaempfer, Zimmermann, Nationalstolz, Herder, Humanität

※トリアー大学 (ドイツ連邦共和国)

※※明治学院大学法学部

(Received 23 August, 2004 ; accepted 9 November, 2004)

## 〇. 批判的な日本紹介から人間性の探求へ

【文献渉猟の徹底と批判精神の威力】《水陸旅行叢書》に収められた日本関連の記事を読み進めると、ケンペル『日本誌』に対する批判的な評価に出くわす。それは主に〔時代的にはケンペルより後の〕シャルルヴォアの著作に依拠してのことであり、ケンペルの日本での交際ぶりや日本人理解の表層性を突いたものとして興味深い。それはこの叢書の編者が文献渉猟を徹底し、それに裏打ちされた批判精神を発露したものと見れば、ドイツ啓蒙主義の精神に恥じないものである。だが、ケンペル批判の当否を見定めるためには、当該の諸文献に即した慎重な検討が必要となろう。

【才気煥発な医師による日本の心性の分析】ツインマンの人の思想は、これまで我が国ではほとんど紹介されることがない。彼の日本人論にも啓蒙主義的な批判精神が横溢しているが、それは鋭利な人間性の分析であると同時に、勢い、暴走しかねない危うさを宿している。たしかに、「人間の虚栄心はこのような無知によって養われ、また同じこの無知が、他人を蔑視する人の軽蔑心を生む一方で、他人を軽蔑する人はまた他人からも軽蔑されるのである」(76頁)とは至言である。だが、「日本人は心の中に、或る種の特別な偉大さを有している。日本人は生命を軽蔑しているが、自殺となると、日本ではイギリスやスイスの場合よりも遥かに蔑まれる」(同)という日本人の「自殺の蔑視」の説は、はたして当を得たものであろうか。

【風土学に定位した包括的な人間性探求】独自の風土学を展開したヘルダーの場合には、一方では地理や歴史の知見を踏まえた科学的な考察態度が、そして他方ではロマン主義に通じる文学的な志向が際立っている。彼の日本観で特徴的なのは、「中国との対比」の徹底であろう。なるほど両国の国民性に関する詳細な分析を欠くとはいえ、「美化された動物学はその目的に反している。美化された人間学も同じことである」(81頁)や「我々は、地球の生きた観相学と人間学を手に入れることができるであろう」(同)という文言には、まさに「人間性 (Humanität)」の探求に生涯を賭けたヘルダーの意気込みが感じられる。

## Ⅲ. ケンペル『日本誌』の批判的な受容と日本像の刷新 — 《水陸旅行叢書》第11巻

(1753) 【翻訳と注解: 中澤 武, 中澤 孝子】

〔第4節 日本の政治体制〕日本の君主は有力者たちをひとまず服従させたうえで、今度はいかにして彼らをその服従状態に留めておこうかと、昼も夜も企てをめぐらせている。この君主は、有力者たちの力を弱めるために、彼らの領地を分割し、彼らの意図の裏をかくいて彼らの間に不和を引き起こそうと、思いつく限りのあらゆる手だてを講じるのである。日本の君主は、その宮廷に仕える各人に細君を世話してやるのであるが、この皇帝の手から婦人を受け取ったならば、これをきわめて恭しく遇さねばならない。彼女のために専用の宮殿が建てられ、数多くの従者が彼女に当てがわれる。彼女の身の回りの面倒をみるために、娘たちが非常に慎重に選り出され、この娘たちは特別に従順で行儀良く奉仕しなくてはならない。彼女たちは女官に監視されながら16人ずつの組に分けられ、1組ごとに交替して奉仕に当る。また、各組はそれぞれ、別の色の着物をまとっている。国中で最も高貴な身分の氏族から選ばれた侍女たちの中には、15年から20年、それどころか一生奉公する者も多い。彼女たちは一般にかなり年少のうちに奉公に上がって、年季が明けると身分相応の結婚をする。

このような国情をどの面から見ても、日本国がその総支配者によって高度の独裁的手法で支配されていて、また、この専制的な政治体制をそれが導入されたときと同じ仕方、つまり権謀術数をもって維持しようと企てていることが分かる。〔以下、省略〕

日本の法律は皇帝の命令と幾つかの大昔から受け継がれた法とから成っており、この法律に関して訴訟を起こすことのできる裁判所などまったく存在しない。ところが領主たちや有力者たちは、このような厳格な法制度の適用を通常は免れている。もしも彼らが有罪を宣告されるようなことがあれば、彼らは宮廷の命令で、あらかじめ定められた2つの島のうちの1つに追放される。だが、彼らが死刑に処せられる場合は、その刑罰は割腹の刑であり、もしもこのとき、皇帝からの恩赦が得られないと、さらに血縁者すべても彼らと共に来世に旅立たねばならない。罪人に慈悲が与えら

れる場合には、この罪人に最も近い者が許可を得て、自分の家でこの罪人を処刑することができる。そして、この死刑方法では死刑執行人が少しも非難されないので同じく、処刑された者もまた、それ以上に非難されることはない。とはいえ、他人の手によって死なねばならないというのは、いつでも多少の恥となるものである。さて、大抵の場合、死罪になる者は自ら腹を切る許しを請うものである。この罪人は、そのような慈悲が与えられたときには、血縁者や親友を呼び寄せ、高価な衣装を身に付けたうえで、現在の心境について言葉を選んで演説をする。それが終わると、彼は喜びの表情で腹を露出し、十字に刀を入れる。この死刑方法はどのような種類の、またどれほどひどい犯罪でも、その罪を帳消しにすることができる。それどころかその罪人は、それ以降、勇者と見なされるのである。彼の血縁者にはまったく汚名が着せられないし、その財産も奪われない。身分の低い人々が受ける一般的な死刑は、磔の刑か火あぶりの刑であるが、ときには斬首刑に処せられた人々もいれば、刀で体をばらばらに切断される場合もある。このようにして厳格に死刑が執行されることによって、帝国のあらゆる階層に属する人々にその義務を守らせるという点では、分厚い法典よりも遥かに大きな効果が得られるのである。ところで、どのような領主でも、あるいは支配層に属するどのような人物でも、それどころか、一家の父であれば誰であっても、その管轄権の及ぶ範囲で争い事が発生し、これが仲裁を通して調停されなかった場合には、どのような争い事についても最終的な判決を下すのは彼らであり、その判決には控訴の余地が全然ない。係争中の事例が法律に明記されていない場合、彼らは常識に従って判決を下す。皇帝の発する布告は常にとても短い。どうしてその命令が出されたのかを説明できるような根拠は、まったく書き加えられていない。いやそればかりか、君主が刑罰や死刑方法の決定までも尚書官に委ねることも珍しくない。この短くまとめられた文体は、日本人にはかなり威厳あるものに見えるらしく、国主の公正さや見識を少しでも疑いなどすれば、それは日本人にとって最も罪深い犯罪になるらしい。

#### 〔第5節 日本人の体型、服装、教育、学問、芸術と

文字〕中国人と日本人とでは、容姿の美醜に関してお互いに相手の方が醜いと主張する理由は乏しい。少なくとも、我々がこれまですでに何度か十分に敬意を表しながらその説に言及した或る歴史家〔前出のシャルルヴォア〕は、そのように語っている。この歴史家の言葉には、日本人の容貌に関して、鋭い洞察を含んださまざまな情報が集められているのが分かる。この歴史家に言わせれば、概して日本人はかなり醜い奴等である。日本人は鉛色の顔をしていて、その目は小さいが、中国人ほど奥目ではない。そのうえ日本人の脚は不格好で、体格は中位よりも小さい。日本人の鼻は丸みを帯びてかなり平たく、上を向いている。眉毛は太く頬は扁平で、ごつごつした顔つきである。また彼らは、元々ひどく薄い髭を、剃るか引き抜くかしている。とはいえ、この描写はあらゆる人に当てはまるわけではない。事実、高貴な殿方たちは、大抵その性格にも容貌にも不快なところは少しもない。ひょっとしたら彼らには生まれつき或る種の上品な性質が備わっていて、それがまったく自然に表面に現れているために、それほど不格好には見えないのかもしれない。日本女性はすべての旅行者から美しいと言われている。ケンベルは備前地方の女性はアジアの女性の中で最も美しいと考えているが、その一方で、日本女性はとても背が小さいと述べている。またさらに、彼女たちは顔を塗りたくっているのも、彼女たちが自然のままに本当にとっても美しいのか、疑念を抱かれても当然であろう。

日本人の衣服は飾り気がないが、その着心地はかなりよい。有力者やいやしくも貴族たる者は、皆その身分の違いに応じて、繊細で金銀の花模様の織り込まれた、八丈島や鎌倉で仕上げられた絹製の長い上着を後ろに引きずっている。首の周りにはスカーフのような小さな帯を付けている。また、さらにもう1本の少し幅の広い帯を丈の長い襦袢の上に締めているが、この襦袢もまた高価な素材から作られている。袖は幅が広く、垂れ下がっている。だが、刀や短剣ほどに日本人が贅を凝らす物は他にない。彼らは刀を2本も帯に差しており、刀の柄や、しばしば鞘までも真珠やダイヤモンドで飾らせている。一般市民は——彼らはたいいてい商人や職人や兵士だが——ふくらはぎまでしか届かない着物を着ている。この着物の袖も、肘から先には届かないほどの長さである。つまり、肘から先は腕が

剥き出しなのだが、刀だけは誰もがひとり1本ずつ、大変よく手入れされたものを身に付けている。さらに一般市民は、髪型でも身分の高い人々から区別されている。というのも、一般市民が後頭部の髪を剃っているのに対して、貴族は額の上の髪を剃って、残りの部分の髪は背中に垂らしているからである。彼らはこの髪型が大変に美しく、自分たちに似合っていると思っており、それでほとんどいつも頭に何もかぶらずに歩き回っている。ところが、旅行の際に彼らは麦藁ないし竹で細かく編み上げられた大きな帽子をかぶり、これを綿の詰められた幅の広い絹紐で額の下にしっかり結び付けている。女性も男性とまったく同じような帽子をかぶっている。この帽子は内側から外が透けて見えるうえに軽くて、いったん濡れると雨を通さない。男性がこの帽子をかぶると、遠目から見て、大きな覆いが彼らの短軀をほとんどまったく隠してしまうので、これは確かにあまり見栄えのよい姿ではない。だが、女性にはそのような帽子がよく似合うので、市中でも女性はそれをかぶるのを常とする。

日本女性は一般に男性よりも華美な衣装をまとっている。髪を結び上げているところはすべての日本女性に共通だが、身分の違いによって髪の結い方も色々である。身分の低い女性は大概、スペインやイタリアの女性がしているように、ただ頭の上で髪をまとめて、櫛を刺しているだけである。それに対して、身分の高い女性は髪を編んで、それを背中に垂らしている。耳の上には真珠や宝石のついた櫛を刺し、耳には丸い形の小さい真珠の飾り物を付けていて、これがとても可愛らしい感じを与える。彼女たちの帯は幅が広く、花や色々な模様で飾られていて、着物の高価さに釣り合っている。この着物はたくさんの長い胴着からなり、その上にまた何寸か裾を引きずった前開きの長いマントを羽織る。上記の胴着の数から、この着物をまとった女性の身分の高さが分かる。百枚も着ている女性もいるらしい。だが、この着物はとても薄くできているので、かなりの枚数を重ね着できるのである。さて、最も高貴な身分に属する女性は、多くの従者を従えずにはけっして外出しない。こういう女性が外出するときには、その後に多数の娘たちが従って、高価なハンカチやスリッパや、さまざまな包みがいっぱい載せられた大きなお盆を携行する。奥様の傍には侍女たちが

付き添って歩き、或る者は扇、別の者は天蓋付きの高価な縁取りの施された日傘をもって行く。キリスト教徒の女性は、教会に行くときは、頭に大きな帽子をかぶる。これは顔が隠れるばかりでなく、足元まで垂れ下がっている。外国から導入された習慣に従って、女性は布をかぶらずに教会を訪れることはできない。しかし、そのような訪問はしばしば許されるのではなく、年に1回しか許されていない。また、どれほど距離が短くても、従者をともなって、乗り物に乗せて運んでもらうのである。

若者は、男性も女性も、年齢を重ねるに従って服装を変える。若者は男女ともかなりの軽装で、大抵は好んで被り物なしで外出する。これには若者を早いうちから寒さに慣れさせる意味もある。靴の代わりに若者は一種のスリッパを履いていて、これはしっかりと結ばれているのではなく、簡単に脱ぐことができる。そのような履き物は好みに応じて鹿皮や藁や葦や竹で作られ、非常にうまく編まれている。

日本人は、子供の知力を高めるのによいことであれば、何事も疎かにしない。この点では性別は問題ではない。日本では教養のある女性は珍しくない。少なくとも彼女たちは、教養を身につけるための時間が足りないということはない。というのも、彼女たちは公事に関わるのを禁じられているからである。女子教育は——男子の場合も同じ事だが——心情の教育から始まる。かなり早くから、子供たちは名誉心や理性を原則として、それに即して行動するように慣らされる。その後、子供たちは国語を教えられる。つまり、うまく話したり、読んだり、文字を上手に書いたりすることを学ぶのである。この書き方の習得に、日本人の子供は特に熱心に取り組む。その後、子供たちは宗教の学習へと進む。これに続いて、子供たちは優れた論理学を習い、それによって真と偽とを区別し、正しく推論することを教えられる。最後に弁論術、詩作、倫理学、絵画を学ぶ。これらの技芸で日本人に勝る生得的才能をもった民族は少ない。

日本人の想像力はとても優れている。そればかりか、日本人は人間の心情を理解する技が並外れて優れているだけでなく、人の心を感動させる達人でもある。日本人の牧師による説教を聞いた多くの宣教師の証言によれば、日本人の説教ほど感動的で印象深く、弁論術

の真髓を究めた説教を他では1度も聞いたことがなかったし、日本では多くの聴衆が感涙に咽ぶことも珍しくないそうである。このような弁論術と並んで、日本の詩芸術には特別な雅趣が見いだされる。だが日本の詩人たちは、演劇作品においてその才能を最もよく示している。日本の劇作はちょうど我々のものと同じように幕や場に分けられており、序幕も用意されている。序幕は作品全体についての概要を伝えるものであるが、劇作の結末には触れない。なぜなら、結末が観客にとって思いがけないものとして訪れるように、常に心配りをしているからである。舞台の装飾は美しく、作品の性質に応じて設定されている。劇の合間には、踊りや滑稽な寸劇などを観ることができる。いずれにせよ、悲劇も喜劇も、例外なく道徳上の教えに関連している。悲劇の作風は莊重かつ厳肅である。悲劇では普通、非常に気高い行為が演じられる。

一般人向けの演劇では複数の作品が次々と上演され、その題材は神話や英雄譚から採られている。神や英雄の冒険や著名な行為、恋愛物語が韻文に編まれ、じつにさまざまな楽器の響く中で踊りと共に歌い上げられる。幕間の出し物は短く楽しい。さまざまな種類の道化芝居が上演され、或るものは下らない事を話題にしたり、他のものは言葉を喋らないでパントマイムのように踊って、表現したいと思うことをちょっとした身振り手振りやポーズで、しかも拍子に合わせて表現しようとする。舞台では普通、噴水や橋、家、庭、木々、山、動物などが呈示されるが、すべては実物大の大きさで、しかも場面をすばやく変えることができるように設置されている。出演者は、大抵その演劇の上演に出資している市街区出身の男の子だが、離散家庭から連れてこられた少女のこともある。彼らは役の性質に応じて衣装を着けるが、皆とても華やかで美しい。同じ劇作を毎年繰り返すのは禁じられている。ケンペルは、彼が長崎で観た演劇の上演された劇場について、次のように記している。「側翼付きの大きな寺院が、竹筒を用いて建てられていた。その切妻風の壁は市の立つ広場に面しており、その屋根は藁と柘植の枝で葺かれていて、そのためこの建物は物置小屋によく似ていた。案の定、昔の日本人の貧しい暮らしも演目に入っていたのだ。この建物を正面から見ると、その傍らには大きな樅の木が立っていて、広場の残り三方は仕切

棧敷に区切られており、かなりの数の観客席が設えられていた。神官たちは、建物の正面にちょうど向き合って3段になった座席に整然と座っていた。一番上の座席は上級職の神官たちの席で、彼らは黒い長衣をまとい、権力の象徴として手に短い棒をもっているの、それと分かる。2段目の座席には、これより少し下級の神主たち（Canusis）が4人、白色の長い上着を身につけて、頭に黒い漆塗りの帽子をかぶって座っていた。残りの者は全員、だいたい神主と同じような服装だった。寺院に属する従僕たちは頭に何もかぶらずに、厳めしい様子の主人たちの後ろに立っていた。広場の反対側では、聖職者たちに向き合う位置に、下が剥き出しの地面になっているところに少し高めに天幕が張ってあり、そこに町の行政官たちが座を占めていた。彼らの前には槍が立ててあった。この日のような機会での彼らの職務は、混乱を防ぎ、民衆を抑えることにある。これらの行政官たちの傍らには、大勢の下級役人たちがいた。」

前述のように、大がかりな演劇は、各市街区の支出で上演されるのであるが、この支出は毎年順番に1区ずつ、或る決められた回数になるまで行われる。ケンペルは、役者や舞台道具がいかに豪華な様子で登場するかを、祭日の行列に喩えて我々に示している。まず最初に、市街や市区の名前を大きな文字で書いた看板が運び込まれるが、その上には、豪華な天蓋または絹の日傘が掲げられている。それから音楽隊が登場する。おもな楽器はじつにさまざまな種類の笛で、これに幾つかの手持ちの太鼓や大太鼓、鈴が加わる。日本人はこういった楽器の響きがこのうえなく好きなのだが、これはヨーロッパ人には耐えがたい。日本人は体の動きと踊りにメロディーと歌い方を合わせる。これはヨーロッパ人の習慣と比べると、その逆である。音楽隊に続いて、舞台装置および市街区の用意した舞台装飾が現れる。その中でも、かなり重い物は日雇い労働者に運ばせ、その他の物はこの市街区に住む子供たちが、きらびやかに着飾って持ち運ぶ。その後から役者たちが登場し、さらにその後ろには該当市街区の住民全員が正装で続く。最後に、下級身分に属する人々が大勢で、2人ずつ並んで座席や敷物をもって歩く。1つの市街区が披露する芝居は、普通は約45分間続く。それが済むと、行列は来たときと同じ順番で帰って行くの



である。

日本人の画家たちはまったく独自の画風をもつと考えられており、その画風において彼らはまったく比類のない画家と見なされている。日本人画家の筆致は非常に繊細だが、彼らは人物画よりも鳥や果物その他の自然物に精魂を傾けている。彼らは大抵、ただの薄い紙の上に素描をする。3千ないし4千クローネもの値段で売れる作品も多い。日本人画家の作品としてヨーロッパにもたらされているものは、ひどい駄作以外の何ものでもない。それにもかかわらず上記のような賛辞を述べたからといって、これを法螺話だなどと思っ  
てはならない。というのも、前述のような傑作は、日本人の愛好家たちによって非常に大切に保管されているからである。

絵画の場合とは違って、日本人の音楽には見るべき作品はない。そもそも日本人はあまり音楽的才能に恵まれていないので、日本の歌手にもその他の音楽家にも、聞くに値する者はいない。

日本人は多くの本を書くし、また日本には数多くの図書館がある。図書館所蔵の書物はどれも皆、歴史学や倫理学、宗教論そして薬学に関する書物である。ケンペルによれば、日本には土地に関する法規が多少あるとはいえ、法律学の書物が1冊もないのは確かだそうである。また、ケンペルの言葉によれば、そのような土地関係の法規は、その数こそ多くはないが、知恵を絞って作り上げられており、さらに、この法規が少しでも破られると厳罰が下されるため、日本人はそのような法規を厳格に守っているそうである。

聖職者がいつも頭を悩ませている〔宗教の〕教義の問題を別にすれば、日本人は特別に深く考えなければならぬ学問には興味がないように見える。彼らは数学や形而上学はおろか、自然科学の知識も欠いている。それと同じく、天体についての日本人の知識も貧しい。日本人の知っている時代区分や自然元素、1日を時間に分ける仕方や年数の数え方を見ると、彼らが物事の比較や計算において特別に優れているという印象は得られない。

日本人は年代計算において3種類の算定法を用いている。第1の算定法〔皇紀〕は神武(Syn Mu)という初代天皇で始まるが、これは前述のように紀元前660年に当る。残りの2種類の算定法は、日本人が中国人

から手に入れたものである。年号(Nengo)と呼ばれる算定法〔元号〕は中国で発明され、日本では第36代の内裏(Dairi)の治世に導入された。各年号は或る年数だけ続くが、それが20年よりも永いのは稀で、大抵は20年以下である。内裏は1つの年号を決め、これに名称と文字を与え、それまでの古い年号と取り替える権限を有する。内裏は普通、例えば国制や信仰に関する大変革のような重大な出来事のあった際に年号を改め、年号を通じてそうした出来事の記憶を永遠に伝えようとするのである。その他にも、年号は主にカレンダーや皇帝の勅令、公共の宣言、日記や手紙で使用される。確かに年号は出版物の中でも用いられるし、それが日本の歴史に関する出版物である場合には、特によく年号が用いられる。だがそのような場合、最初に述べた算定法を付け加えるのが普通である。新しい年号は、たとえそれがしばしば何カ月か前に定められたものであっても、普通は新年に始められる。とはいえ、新しい年号が始まってからもなお、書物の表題や手紙にはしばしば古い年号が使われている。しかし、ケンペルの推測によれば、そのような不統一は、国民がその年号に与えられた文字に賛成しないためか、または国が大きいので、年号が一度に周知徹底できないことから生じるのであろう。日本で年号に次いで好まれている中国の年代算定法〔還暦〕は、60年を一周とする循環からなり、一回りは12個の星座を表す文字の組み合わせで構成される。12星座の動物を表す文字を10要素の文字と5回組み合わせるか、あるいは10要素を動物と6回組み合わせることによって、60種の合成語あるいは60種の記号が生まれる。これらの各々が1年を意味する。60年周期が経過した後には、また次の60年周期が始まる。このような年代算定法のおかげで、日本の年代計算および歴史は中国のそれと常に一致する。しかし両者の間には、中国人が各々の年だけでなく各々の年周期が幾つ目の周期であるかまで記録しているのに対して、日本では年周期を数えないという違いがある。ケンペルの意見によれば、この差異は単に日本人の思い上がりに由来するらしい。というのも、日本人が君主制を作ろうと思いつく以前に、中国ではすでに数え切れないほどの年周期が過ぎ去っていた、という事実を目の当りにするのは、日本人にはきわめて不愉快なことだからである。

日本人が12個の干支（Jetta）と呼ぶ12星座は、彼らの言うところによれば、以下のとおりである。1) 鼠（Ne）2) 牛（Us）3) 虎（Torra）4) 兎（Ow）5) 竜（Tats）6) 蠍（Mi）7) 馬（Uma）8) 羊（Tsitsuse）9) 猿（Jesai）10) 鳥（Torri）11) 犬（In）12) 豚（F）。日本人は1日を12時間とし、また、その1時間を12等分したのものにも、これらの名前をこの順序に従って当てはめている。このような理由で、日付ばかりでなく、1時間単位の時刻、さらには或る事件が起きたのは何時何分であったかまでも歴史書に記録できるのである。ところで、日本人にとって昼間は、日の出から日の入りまでの時間である。この時間を日本人は等間隔に6分割し、夜も同じく6等分する。そこで日本人の1時間は、季節によって長かったり短かったりすることになる。

ところで、日本人によれば自然元素は10個あるが、これは単に、60年周期の中で12星座と組み合わせて用いるために10という数が必要だからにすぎない。というのも、そのような場合以外には、日本人は本来、5つの元素しか知らないからである。つまり、木、火、土、金属、水の5要素がそれであって、これらの各々に2つの記号を付け加えて12要素を得る。日本の1年は冬至と春分との間の、ほぼ2月5日頃に始まる。ところで、日本人は新月の祝いにほとんど迷信的なまでにこだわっているため、2月5日前後でこの日に最も近い新月の日に新年を始める。彼らは月暦〔大陰暦〕のみを用いているため、2年から3年毎に13カ月続く年があり、結局19年に7回の閏年があることになる。

日本の商人が用いる計算術はとても簡単だが正確である。彼らが計算に用いるのは、一種の板の上に小球のはまった棒を置いたもの〔算盤〕である。日本人の商人はこの計算板を用いて、加減乗除を中国人と同じように一瞬にして行う。たぶん日本人は、中国人からこのような技術を借りてきたのであろう。

日本人の中で学があるのは僧たちである。僧たちは、14才になるまで彼らのもとに留まる若者たちを、自分たちの力だけで教育しなければならない。このような学校は非常に数が多い。フランシスコ・ザビエルの手紙を読むと、都（Meaco）の周辺には当時4つの学校があって、その各校に少なくとも3千人から4千人の生徒がいるそうである。それにもかかわらず、全国で

生徒数の最も多い足利学校（Schule zu Bandue）の生徒数は、それを遥かに上回っていたそうである。女子の場合は、前記のような仕方と男子と同じように——ただし尼僧院で——教育を受ける。

若者たちは両親の家に戻るとすぐに、年齢に応じた鍛錬を始めさせられる。若者には武器が与えられるが、その際には儀式が行われ、その日は盛大な祭日になる。このことから、日本国民には戦闘を好む傾向が強いことが見て取られる。日本人は、こと戦争についての知識に関しては、これをすぐさま完璧に取り入れる。最初に銃器をこの国にもたらしたヨーロッパ人たちは、日本人があまりにも素早く銃器の使い方を学び取ったので、驚きの目を見張ったのである。日本人は誰でも生まれながらの兵士である。実際のところ、日本人は本当は武器のことにしか関心がないのである。彼らは、たとえ睡眠中であっても、けっして武器を手放さない。つまり、睡眠中でも武器を枕の下に置いているのである。市中で刀を抜くことは非常に厳しく禁じられているが、それにもかかわらず、日本人はどのような些細な機会にもすぐに刀を抜く。もしも市中での武器使用がこの上なく厳格に禁じられていなければ、大変な無秩序が生じることであろう。

日本国の歴史書は、内裏の宮殿で編纂される。それは皇帝の一族に属する皇子と皇女の仕事である。編纂された歴史書は、写本が作られはしても、或る期間が過ぎるまで印刷されずに宮廷で厳重に保管される。イエズス会の宣教師たちが、以前に「日本国の古史は、それが物語るさまざまな出来事の重要性に鑑みて、必ずその愛好者を見いだすだろう」などと請合うことができたにもかかわらず、実際には日本国の古史について少しも報告していないのは、こうした秘密保持のためである。

日本では薬理学が外科的治療よりも高く評価されている。だが、我々が目にする旅行記の中には、日本人が薬理学のみに頼っているという記述はまったく見つかからない。むしろ日本の医者は、人間の生命および健康に関わる術を、そのあらゆる側面から治療に用いるのである。日本の医者は、引出しが12個ある小箱を使用人に携行させるが、これらの引出しの各々には薬草その他の薬が入った144個の小袋が入っている。そこから医者は、患者にちょうどよく効く薬を取り出すの

である。日本の医者、中国人〔の医者〕と同じく、非常に脈に精通している。日本の医者に言わせれば、脈を半時間も精確に診察したならば、病因だけでなく、症状もすべて分かるのである。日本の医者は薬をあまり多量に処方しすぎて患者に負担をかけるといったことはないが、彼らの診療法は、ヨーロッパではほとんど受け入れられないであろう。彼らは患者から採血〔瀉血〕するわけでもなく、何か煮沸したものを患者に飲ませるわけでもない。なぜなら、胃が弱っているときには何か手を加えた物でないと消化できない、と日本の医者は信じているからである。彼らは患者の気の向くままにすべてを許可するが、それは、彼らの意見では、いまのところ患者の体液は調和を崩しているが、患者の身体は自然〔本性〕は何が自分にとって有用であるかを知っており、その他には何も求めないからである。日本人の医者は、入浴を頻繁に繰り返すことによって病気を防ぐという目標に向けて、最大限に心を配っている。〔以下、3段落にわたり省略〕

工芸の技術は日本全土でかなり盛んである。こうした技術は中国から入ってきたものである。日本人の発明した技術はわずかしかなが、日本人は入手した技術をどれでもきわめて完璧に仕上げる力量がある。日本人は銅板画や金メッキ、そして彫版技術の達人である。日本製の紙は中国製の紙よりもずっと良質で、また八丈島（Fatsisio）や鎌倉で作られる織物の美しさや繊細さは、中国人が一度も達成したことのないものである。日本の陶器は秀逸なことで有名である。刀は比類なく強靱である。日本製の漆〔器〕は他国製のどの漆〔器〕にも勝るし、また日本以外の国では、どこも日本ほど丁寧な塗装の作業を行わない。日本人は、飲み物や料理の作り方では、どんなインド人をも上回っている。だが、彼らの器用さや勤勉さは、何よりも農業によってよく示されている。農業にかけては、日本人はどれほど狭い土地でも活用せずにいないほどである。

我々がこれまで日本人について観察してきたことは、すべて単に日本人の外見や彼らによって習得される練達に関するだけであって、それらは日本人の気質を知ることには何も貢献していない。ケンペルは、日本人は知力の点で少しも劣ったところのある民族とは思わない、と一再ならず述べている。しかし、上述の

ようなケンペル以後の歴史家〔シャルルヴォア〕は、このようなケンペルによる日本人像を不完全なものに見なしている。この歴史家の意見によれば、ケンペルは根本的に日本人を理解していなかった、ということになる。なぜなら、ケンペルは日本人との間に、本物の信頼関係を築くことができなかったからである。ケンペルがイエズス会の宣教師よりも詳細に日本の自然史〔誌〕を調査したということは、確かに否定できない。ケンペルが自慢しているように、彼は日本人の持つ資料を調べ上げる方途を見いだしたのである。だが、彼は日本の有力者たちを、劇中の登場人物を観るように、有力者による豪華な演出を通して眺めたのである。ケンペルは役人や商人や職人と交際したが、彼らの心情にまで踏み込むことはできなかった。なぜなら、そのためには、日本人に或る程度は心を開いてもらわねばならないが、外国人に心を開くことは日本人にはけっして許されないからである。いずれにしても、日本人の気質について叙述しようと思ったら、日本で活躍した初期の宣教師たちの言葉を頼るしかない。というのも、彼らは永い間日本に腰を落ちつけて住み、自由な交際を通して住民と知り合えたからである。以下に私が引用する歴史家は、このような優れた情報源から、中国人と日本人とを比較するのに十分なほどの情報を集めたのであるが、そこから私は、以下のように、日本人に関することだけを引用しようと思う。というのも、この歴史家自身も言うように、こうした概略であっても正確な叙述のほうが、さまざまな事例を事細かに掻き集めて日本人の習慣と我々のそれとの違いを強調し、そこから日本人の生活様式が我々のそれと比べてまったく逆であるなどと結論づけるよりは、遥かに日本人についての理解に貢献するからである。例えば「日本人は白を葬式の色だと考えており、祝儀には反対に黒い衣装を着る。馬に乗るときは右側から乗るが、その理由は、このような高貴な行為に左足を軸足としてはならないからである。家では正装しているが、外出時にはそれを脱ぐ」等々。このような事例は、ただの習慣以外の何ものでもなく、日本人の思想とは関係がない。ましてや、それらは日本人の心が有する傾向とはまったく無関係である。ただし、真の内面的性情はそうした心の傾向から生まれるのである。

名誉心は日本人のあらゆる行動の原理である。また



名誉心は、日本人の有するほとんどの徳目や不徳の源である。日本人は率直で、まじめで、友情に厚く、ほとんど浪費家とも呼べるほど気前がよく、世話好きで、寛容で、礼儀正しく、金持ちになろうとする傾向など少しももっていない。だから商売を軽視している。また、そのような理由から、まともな暮らしをしている民族のうちで、日本人ほど一般に貧しい民族はない。ただし、これは日本人の有する何者にも服従しない気質から生じた貧困であり、徳と結び付いているがゆえに尊敬すべき貧困であって、古代ローマ人をあれほど他の民族に卓越させたその貧困である。普通の日本人は、最低限必要な物以外、何も所有していない。だが、日本人の家は、どこを見てもとても清潔である。一家の主自身も満足しきった顔つきをしており、どのような贅沢に対してもきわめて強い嫌悪感を示す。この豊かな国の財物は、すべて領主や有力者の手中にあって、彼らはこの財物を自分たちの名誉になるように用いる術を知っている。それ以上の贅沢が行われることはない。この点に関しては、どれほど裕福な君主国の歴史にも、日本に勝る例は見いだされない。そのさい最もすばらしいのは、領主や有力者による財物の独占に対して民衆が嫉妬の念を抱かないことである。たとえ身分のある人士が、不運に見舞われるか皇帝の不興を買うかして苦境に陥っても、それにもかかわらず、この人士は相変わらず誇り高い態度を保ち、かつて大いに豊かに暮らしていた頃と同じように敬意を払われる。そればかりか、ひどい貧乏のうちに暮らしていても、この人士が身分違いの結婚をするように促されるようなことはけっしてない。身分とは関係なしに、その他の日本人も名誉にこだわっている。どれほど身分の低い日本人でも、誰かが彼に無礼な物の言い方をしたならば、たとえそれが身分の高い人であっても腹を立てるし、自分は不満を発散する権利があると考え。このような事情から、日本人は各人が他人に礼節をもって接するのである。日本人の寛容さ、知力の鋭さ、純真なる良心、熱い愛国心、自分の命を重く考えないこと、そして大いなる胆力、これらはすべて、どの日本人の顔からも読みとられる性質であり、日本人を駆り立てて信じられないような事業を敢行させるものであるが、これらについても名誉心の場合と同じことが当てはまる。

日本では友人関係に基づく義務は、婚姻関係に基づく権利に勝るとも劣らない重大な義務である。友人を助けたり、これを弁護する際には、日本人はどのような危険も恐れない。また、どれほどひどい拷問にかけても、犯罪人に共犯者について自白させることはできない。例えば、或る日本人のところに見知らぬ人間が逃げ込んできて、生命や名誉を守ってくれるよう懇願したとすれば、保護を請願された日本人は、自分の身体や生命や財産を賭するのであり、その際には結果について憂慮することもなく、また妻子のことも顧みないのである。無用の争いを引き起こしたり、誰かを中傷したり、一日中無駄話をしたりする人は、日本では悪い印象を抱かれる。というのも、そのような人は肝の小さい腰抜けか、愚か者と見なされるからである。日本では賭博は許されていない。なぜなら、賭博は恥ずべき行為であり、名誉心のある人間にとってはじつに不謹慎な蕩尽行為と見なされるからである。さて、日本人は神々を崇拝しているし、また貢献や権威のゆえに敬われるべき人物には敬意を払ってもいるが、そのさい3つの主要な動機、つまり神に対する畏敬の念と、生まれつきの気質、そして教育のうちでどれが最も重要な役割を果たしているのかを決定するのは困難である。だが、ここでは日本人の、国主たちに対する恭順を度外視しなければならない。というのも、多くの場合、日本人は、ただ国主たちの権力のゆえに、また恐怖心から恭順の態度を取っているにすぎないからである。だがそれは臣民よりも、むしろ国王たちの責任なのである。それは、この元来が誇り高く、また自由を求める傾向があると同時に従順な態度をとったり時流に従ったりする能力もある日本の人民に対して、国主たちがあまりに専横的な態度で接しているためである。

ところが、日本人はけっして平穏な民族ではなく、それどころか大変に執念深く、また疑い深い。日本人は貧困の中に生活しており、また生まれつき胆力を備えているにもかかわらず、驚くほど自堕落な生活を送っている。しかし、日本人を再び正道へ導くことは難しくない。なぜなら、日本人は道徳的傾向をもっているからである。

日本人は元来、敬虔で物覚えがよい。日本人はたとえ自分に罰を下すことになる真実であっても、むしろ

その真実を愛する。人から過失を指摘されれば、その過ちを認め、むしろ自分の義務や過失について教えを受けたがるのである。それどころか、高貴な身分の人々は皆、自分自身の信頼できる家臣をもっていて、この家臣は主人にその過失を言上する以外、何もしないのである。結局、日本では人を騙すことが最も憎まれており、どのような小さな嘘も死をもって罰せられる。日本人は誰も皆、自分の信じている宗教の掟に従って、為さねばならないと思うことを為す。日本人は正しい選択をすれば、それだけで満足なのである。自分の利益のために宗教を偽装手段として利用する者など1人もいない。実際、日本国の神々を信じてはいないが、外面的には神々を崇拝しているような人々でさえ、このような拘束を必要と考えており、その理由は秩序への愛、すなわち民衆の怒りを買うのではないかという恐れなのである。日本人が神を冒瀆したという例はない。不平を言ったりすることもほとんどない。日本人はほとんど全員が、どれほど大きな不幸に見舞われても動揺した姿勢を見せない。これはなかば奇跡のようなものである。父親が彼の息子に対して、顔色ひとつ変えず死刑を宣告したりもするが、かえってそこに父親の愛情が窺われる。これと同じような事例があまりにも数多くあるので、日本人は誰もこのような事例を気に留めないほどである。敵が自分を捜していることを知った人は、敵が現れそうな場所を故意に1人で訪れる。彼はその敵と言葉を交わし、敵のことを褒めそやしたりして、その敵のために色々と親切にしたりもする。ただし、復讐の意図は一瞬もこの人の頭から離れない。この人自身に復讐の機会がなかった場合には、その復讐を果たす責任はこの人の息子に受け継がれる。これほどの周到さはすべて、確実に復讐を果たすというただ1つの最終目的に向けられている。ちなみに、復讐は普通、高貴な仕方で行なわれる。日本人が落ちつきはらって、物事にこだわらない態度を見せるときこそ、むしろ最も日本人を警戒しなければならない。

日本人は自分自身を非常に高く評価する一方で、外国人をひどく見下している。それは、自国に対して強い敬意を抱いているからばかりでなく、日本人が他の助けを必要としないからでもあり、またこの世では何も恐ろしいと思わず、死さえも恐れないからでもある。

日本人は大胆な喜びをもって死を見つめ、取るに足らない理由からであっても自発的に死を選ぶ。このように自分の生命を軽視しているため、日本人は他人に対しても——どれほど身近な血縁者でも例外なく——残酷であり、弱者や病人に対しては厳しく、無慈悲である。また日本人は、強情であるとともに生命を軽視することから、軽率で心変わりしやすい。日本人が「アジアのイギリス人」と呼ばれるのも、理由のないことではない。

日本では人々の社交は気軽に行われる。日本人はその物腰と快活な精神と或る種の自由で束縛を受けない性格とのために、巧みな社交家であり、ヨーロッパの特に交際上手な国とも比肩する。ケンペルによれば、ポルトガル人が当初この国で商売上の大きな成功を収めたのも、日本人とポルトガル人との双方が同じ生活様式と気質をもっているためである、と考えられる。では何が具体的に同じかという点、ケンペルによれば、それは愛想のよい性格、および真面目さと利発さとがちょうどよく混じり合った物腰である。その他にまた、日本に渡った初期の宣教師たちの手紙からも、彼らが有力者からも身分の低い者からも同じように気の置けない態度で受け入れられたことが分かる。

最後にこの歴史家は、日本人の上品で高貴な魂に加えて、彼らの心の善良さに言及することで、日本人に関する記述を締め括っている。身分の高い一家の主、すなわち父や夫である者は、彼らの家臣や妻子に関して、生か死かを決定する権利をもっている。しかし、主人とその召使いとの関係は、それとは少し違っている。確かに、主人は召使いの仕出かした過ちにも責任を負わねばならず、それゆえまた、召使いが主人の怒りを買ったときには即座にこれを切り捨てても、そのような逆上の理由が適法であることを証明できさえすれば、この主人には何の罰も下されないほど、主人は自分の召使いに対して大きな権力を有している。だが召使いの方は、恐れからよりも、むしろ主人に対する愛情からその勤めを行うのである。この島国の住民の魂は、あまりにも上品であると同時に優しい傾向をもつので、フランシスコ・ザビエルはいつも特別な驚きを込めてそのことを語っている。例えばザビエルは、或る手紙の中で、「日本人について語りだしたら、私はけっして話し終えることができない。というのも、日

本人は本当に私の心の喜びだからである」と述べている。彼の後継者たちもまったく同じように語っている。そのような昔の使徒〔宣教師〕たちの1人が語るところでは、キリスト教徒になりたての日本人たちは皆、ほんのわずかな友好の<sup>しるし</sup>印でも大いに喜んで受け取った。すなわち、赤貧洗うが如き人々が、一日中イエズス会のために働いても、イエズス会の人々が日本人たちの仕事に満足してくれれば、それだけでもう十分な報酬を得たと思っていたそうである。これとは逆に、日本人は少しでも冷淡さを表に出してしまったときには、そのことを非常に気に病んでいたという。ある宣教師が日本人の誰かにちょっと親切にしてやると、その人の主人に当る非キリスト教徒の日本人から感謝されることさえ往々にしてあった。このような優れた心情の在り方は、ここでもまたイエズス会の宣教師の言葉によれば、勤勉さと努力とによって、将来さらに磨き上げられることだろう。子供に良い教育を授けようと心がける両親の熱意も、宗教の教義や倫理学の原理を人々に教示する聖職者たちの勤勉さも、日本人の優れた心情に勝るものではないであろう。そして、これと比較されうるものは、子供が自分たちの存在の創造者に対して抱く愛や崇敬の念、そして神に仕える奉仕者に対する聴衆の尊敬以外には、この世には何もない。キリスト教の信仰がこのような有徳な傾向を完成したのである。

日本人は、上記のような愛すべき心情の在り方を有しているので、彼らが快い社交の席をかなり好むのも驚くべきことではない。彼らは互いに交替で客として招き、その際には節度をわきまえた贅沢をする。だが、日本人の宴会の最大の欠点は、彼らが宴会をすばらしく秩序正しく、また特別に上品に執り行う反面、際限もなくもったいぶった作法に従っていることである。給仕の数は大変なものだが、彼らがちょっとした言葉を発するのさえ聞かれないし、わずかな乱れも見られない。食器は絹の紐で飾られている。爪と嘴を金色に飾られた鳥でなければ食卓には上らない。その他あらゆるものが、これと同じように飾り立てられている。一般に客をもてなす席では、音楽が演奏される。つまり、一言でいえば、目と耳を喜ばせるもので欠けているものは何もない。とはいえ、ケンペルの日記から読み取られるように、贅沢な料理を食べ過ぎる心配は無

用であろう。

私がこれまでの記述の大部分を借用したその歴史家は、最後に、日本人が神を畏怖する心をもっていることを強調している。彼の言葉によれば、そのような神を畏怖する心は日本人に生まれつき備わっているものであり、日本人の有する多くの得難い性質をますます輝かしいものにするが、そのような心は想像もつかないほど力強く、日本人の中に生きている。このような幸福な気質のおかげで、キリスト教は日本で永年にわたり、驚嘆すべき進歩を遂げた。すなわち、この気質によって、日本ではキリスト教徒の数自体と同じくらい多くの聖人が輩出したのである。日本人の有する寛容さと生命の軽視によって、彼らの熱心な信仰熱に英雄的性質が付与された。キリスト教史を扱った書物の中に、その記憶はいつまでも消えずに残るであろう。日本人は、この寛容さと生命の軽視という2つの性質によって、事実いつの時代にもアジアのあらゆる民族に卓越するだろう。日本人の歴史には、古代ローマ人によって遂行されたきわめて瞠目すべき行為を改めて目の当りにしたような出来事が、たくさん見いだされる。〔中略〕生命を何とも思わない人々は、彼らの望むことは何であれ、すべてこれを実行に移す用意がある。そしてこのことから、彼らは戦争の際に、常に並々ならぬ苛烈さを発揮するのである。しかしながら、一部の文筆家のように、日本人の国が、ちょうどその国を取り囲む海と同じように、絶え間ない嵐の中にあるなどと結論づけることもできない。確かに、ある日本史研究者の言葉によれば、我々が16世紀末から17世紀中頃にかけての出来事から日本人の性向を評定しようとすれば、日本人はその好戦的な性格のためにそれまで外国の侵略に屈することこそなかったが、その反面、日本人の国家は、政治形態が欠陥を含んでいたこともあって、常に変動の渦中であつた、などと思い込みかねない。しかし、2、3の政権下の出来事からただちに、日本の政治形態には構造上の欠陥があるなどと結論づけようとするならば、それはちょうど、上述の歴史家が言うように、或る人間が長期にわたって重い病気に耐え抜いた事実から、「この人は元来、不健康な体質なのだろう」などと結論づけるようなものである。さらにまた、帝国の政治形態に幾つか欠陥があるとしても、臣民の側には何の責任もないのである。そして

この政治形態から混乱状態が生じて、国主たちへの忠誠と服従を最大の美德と考えている国民が非難される謂れはまったくないのである。

【訳注】出典： *Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und zu Lande; oder Sammlung aller Reisebeschreibungen, welche bis itzo in verschiedenen Sprachen von allen Völkern herausgegeben worden, und einen vollständigen Begriff von der neuern Erdbeschreibung und Geschichte machen; [...] Durch eine Gesellschaft gelehrter Männer im Englischen zusammen getragen, und aus demselben und dem Französischen ins Deutsche übersetzt*, 21 Bde., Leipzig 1747-1774. 本稿は第11巻（1753）所収の第36, 37章による。

（\*）『日本切支丹史』全3巻（1715）の著者、シャルルヴォア（Pierre François Xavier de Charlevoix, 1682-1761）を指す。彼はイエズス会士としてカナダで布教活動を行ない、20年以上にわたり『トレブー百科事典』の編集にも従事した。

#### IV. 文人医学者による日本民族の精神分析

— J・G・ツィンマーマン『民族的自負心  
について』（補訂版, 1766）

【翻訳と注解： 中澤 武】

【解説】ヨハン・ゲオルク・ツィンマーマン（Johann Georg Zimmermann, 1728-1795）は、スイスの現アールガウ州、ブルグ（Brugg）に生まれ、ベルンとゲッティンゲンで医学を修め、ハラー（Albrecht von Haller, 1708-1777）からは特に大きな影響を受けた。例えば、ツィンマーマンはハラーの指導を受けながら論文『感受性について（*De irritabilitate*）』（1751）によって学位を受けたし、『ハラー伝（*Leben des Herrn von Haller*）』（1755）はツィンマーマンに文筆家としての名声をもたらした。1768年、ツィンマーマンはハノーファーに招聘されてイギリス王室の侍医となり、後にはロシア皇帝エカテリーナ2世の寵を受け、またプロイセンのフリードリヒ大王からも病氣治療の助言を請われるなど、医師として名声を博した。だが、その反面で彼は、飽く無き名誉欲と他者へのあまりに辛辣な批判癖とのために、繰り返し論争や訴

訟沙汰に巻き込まれ、特にその晩年は深い孤独の中にあった。

さらにその思想の面では、ツィンマーマンは当初、ニコライやヴィーラント、レッシング、メンデルスゾーンなどとの交流を通して啓蒙思潮への理解を示していたが、1780年代末にはフランス革命の影響もあって、逆に啓蒙思想家たちを激しく批判するようになった。なお、18世紀の最も重要な哲学辞典の1つに数えられるヴァルヒ（Johann Georg Walch）の『哲学辞典（*Philosophisches Lexicon*）』を見ると、その第4版〔Leipzig 1775（1726）〕では、「感受性（*Empfindlichkeit*）」の項目でハラーと共にツィンマーマンの名を挙げ、上記の学位論文を参照している。

ところで、ツィンマーマンがしばしば所謂「通俗哲学者」として評価されるのは、主に本書『民族的自負心について（*Von dem Nationalstolze*）』（1758, 1768）および著『孤独について（*Ueber die Einsamkeit*）』（4 Bde., 1784/85）の成功によるところが大きい。以下、本書ではしばしば日本の事例を話題にしているが、このような事例は大抵の場合、民族的自負心が否定的影響を及ぼす事例と見なされている。

〔第5章 民族の空想的な古史に基づく自負心について〕ある民族が空想された古代に基づいて抱く自尊心とは、その民族がその起源を恣意的に祖先の時代にさかのぼって設定することにより、自分に帰する気位の高さである。

アテナイ人は卓抜な知恵をもっていたが、卓抜な大言壮語癖もまたもっており、自分たちはまるで集まりさざめく虫どものように群をなしてアッティカの大地から生まれ出た、と信じており、こうした起源のゆえに、植民地を甚だしく蔑視していた。

エジプト人は、かつて自分たちはこの世で最も古い住人であったと見なしており、彼らの言葉によれば、その帝国は、すでにアレキサンダーの治世をさかのぼること4万8,863年にして成立し、まず神々によって支配され、その後は半神たちに、それからようやく人間による支配を受けた、ということである。

日本人も、これと同様に、自分たちは神々からの直系の子孫であると考えている。もしも日本人の先祖は中国人か何かその他の種族だなどと言う人があれば、日本人は最大級の侮蔑を受けたと思うであろう。とはいえ、日本人は謙虚であるから、自分たちの神々の起源を特定しており、けっしてそれを永遠の彼方に押し



やりはしない。

混沌から立ち現れた最初の神である国常立尊（Kuni Toko Dat Sii No Mikotto; Kunitokodatsu no Mikoto）は、他のあらゆる国々に先立って日本を創造したうえで、そこに自らの居を定めた。国常立尊は6柱の後継神たちと共に、名状しがたいほど永い年月にわたって大空の神々の王朝を創り出し、この王朝が日本をその保護下に置いた。これらの神々のうち最初の3柱は、まだ女性というものを身近に置かなかった。なぜなら、その3柱の神々は、特別な仕方ですべての子供を作ってそれを生み出す術を知っていたからである。あとの4柱の神々は、自らのために女性を創造したにもかかわらず、子孫を生み出すにはこの世ならぬ仕方をういていた。だが、それも伊弉諾尊（Jsanagi No Mikotto; Izanagi no Mikoto）が石敲（Jsiatadakki; Ishitataki）という鳥から女性との情の交わり方を学ぶまでのことで、伊弉諾尊は、ちょうど後代の我々卑小な人間どもがそれ以後しているような仕方ですべて女性と交情したのである。このような業によって同時に、日本では天上界の英知者たちの系譜は終わりを告げた。すなわち、伊弉諾尊の一族は、このような許されざる快い刺激によって、その神々しい性状から墮落したのである。

伊弉諾尊は、その祖先と同じく、天界から地上へ移り住んだ。伊弉諾尊の息子である天照大神（Tensho Dai Dsin; Tenshōdaijin = Amaterasu Ōmikami）は、太陽と同一であり、伊弉諾尊の代に続いて5人の半神の治める王朝を築いた。これらの半神たちの支配は、日本人の年代計算によれば、合わせて234万2,467年続いた。日本国民はそのすべてが差別なく天照大神に由来する。また、彼らの戴く内裏たち（Dairys; Dairis）が強大な特権をもって日本国民に君臨しているのは、ただ単にこれらの副皇帝たちが最も古い半神の最も年長の男子の末裔だからである。この半神半人たちによる王朝の歴史は、神道の神官たちによる資料集成に収められているわけであるが、たとえ人が常軌を逸した想像力を駆使してどんなことを考え出したとしても、この王朝の歴史にはかなわない。日本では今日でもなお多くの町や村でこの王朝のことが想起されており、そのような町や村の神殿には、かの英雄たちが用いた剣が恭しく展示されている。〔以下、省略〕

〔第6章 民族の誤った宗教から生じる自負心につい

て〕日本では、おおむね次のような自負心の表れが見受けられる。不受不施（Jusja Fuse; Fufufuse）という教団は前世紀の半ば過ぎに、今上皇帝（Kinseokwo Tai; Kinjō Kōtei）という内裏の治世中に解散させられたが、この教団の信者は自分たちを偉大な者であると空想しており、教団外の人間とつき合えば墮落してしまうとあって一般人との交流を一切避けるほど、自分たちの神聖さと清浄さについて笑止な思い込みを抱いていた。また、神道という日本で最も古く原初的な宗教の指導者たちは、不受不施教の信者に劣らず大いなる自負心を抱いているため、他の新興宗教の司祭たちからも一般庶民からもきわめて注意深く距離を取って、自分たちの交際関係を汚さないように心がけている。しかも、神道の指導者たちによるこのような態度とまったく同じ仕打ちが、仏道（Budso; Butsudō）の司祭たちによる神道側への仕返しとなるのである。

日本の宗教的元首の有する権威は、日本古来の宗教と密接に関連している。また、あらゆる権威が上記の皇帝たちの古い一族に帰属する一方、あらゆる権力が公方様たち（Cubosamas; Kubōsama）に帰せられて以来、皇帝たちの手から真の王権を奪われたにもかかわらず、その皇帝たちの権威はかえって増大したようにさえ見える。日本人は皇帝たちを、彼らの存命中からすでに、神のごとく敬っている。日本の皇帝は、地面を自分の足で触れたならばその神聖さが失われてしまうと信じているかのようであり、頭を太陽の光に晒すのも自分の権威にはふさわしくないと考えている。皇帝の身体は、そのどれほど小さな部分でも、あまりに大きな神聖さを有するので、彼は髪も髭も爪も切らせない。このような不要物は、彼の就寝中に取り除かれる。なぜなら、日本人の考え方によれば、就寝中に皇帝の身体が何かを失ったとすれば、それは窃取された物と見なされ、また内裏に対して窃盗行為が行われても、それは内裏の神聖さをいささかも損わないからである。昔の皇帝は毎朝、玉座に座したまま、手足や首や眼ばかりか身体のどの部分も動かすことなく、数刻の間じっとしていなければならなかったが、これは国家そのものも或る種のまったき静寂を享受するためであった。つまり、もしも皇帝がその眼を日本のどこか特定の地方に向けたならば、その途端にこの地方では火事や飢饉あるいは戦が発生したであろうからである。

「高貴なる一族」「天界の君主」「神々の息子」などというのは日本の元祖皇帝の尊称だったが、その後、内裏たちの全系譜を通して、死を迎えると即座に神々の一員に数えられる内裏たちの尊称となっていた。

このような日本の法王 (Papst) の宮廷は、法王その人にほぼ比肩するほどの貴顕の人士からなっている。彼らは、編簞や蹄鉄その他の品々を作って売ることによって、自らの威儀を正して、彼ら自身や内裏の有する身分にふさわしくしていられるのだから、けっして極端に高貴な人々とはいえない。だが、その反面で彼らは、その家系はそもそも天照大神 (Tenshio Dai Dsin; Tenshōdaijin=Amaterasu Ōmikami) の長男、すなわち日本の第2王朝の初代の半神に由来すると考えている。また、彼らはそれゆえ、彼ら以外の卑しい人間の滓どもに対しては、ほとんどインドにおける婆羅門カーストの者がするように遇するのである。

そればかりか、日本人の中には寺院に仕えているというだけで、その他の点ではただの俗人と変わらないにもかかわらず、貴顕の人士と同じように、自分たちを偉大で神聖かつ清浄であるなどと思い込んでいる者がいる。そのような日本人が異国人のことをどう思っているか、これは次の例から見て取られる。

すなわち、かつてオランダ人たちは、死亡した同国人を長崎港の沖合いに沈めるよう強いられた。なぜなら、日本人は、そのような死体を彼らの国土に埋葬するのは適切でないと思ったからである。とはいえ、中国人以外にはオランダ人だけが、日本人にこの国の片隅への立ち入りを——かなり制限され、また強いられた仕方によるが——許可された唯一の国民なのである。

[以下、省略]

[第8章 外国の事情に関する無知から生じる自負心について] 日本人は普通、自国を「日本 (Nipon; Nihon)」と呼んでいる。この国名は「太陽の光」というほどの意味だといわれており、日本人が自分たちよりも東方にいる他民族とまったく知り合っていないという事情に由来する。というのも、日本人は大地が球体であることを知らず、それゆえまた、どの国も他の或る国に対しては東方に、また別の国に対しては西方に位置するという事実を理解していないからである。中国人も永きにわたって日本人と同じ思い違いをしていたので、

日本列島のことを「日の昇る国」と呼んでいたのである。

「天下」というのも日本の書物にしばしば見られる日本国の別称であるが、正式な名称というよりはむしろ、日本民族がその虚栄心から自国に与えた比喩的な名称である。「天下」とは「天界の下の方」というほどの意味で、そこから日本人は日本国の皇帝のことを「天下様」すなわち「天界の下の方の君主」と呼ぶ。というのも、日本人はかつて自国だけを人間の住む土地と考えており、ケンペルの時代にもなお、自分たちだけを人間と呼び、外国のことは「ウマコク」 (Uma-kokuf) すなわち「悪魔と不浄な霊の住処」と呼んでいたからである。

人間の虚栄心はこのような無知によって養われ、また同じこの無知が、他人を蔑視する人の軽蔑心を生む一方で、他人を軽蔑する人はまた他人からも軽蔑されるのである。虚栄心という観念は、遠く離れた国々においてだけではなく、隣り合った民族の場合にも、また同盟関係にある都市の間にも見いだされる。

このように、国民は外国の事情について知ることが少ないほど、ますます自分を偉いものと考えようになるのである。

[第11章 祖先の勇敢さについての回想によって、ある民族に呼び起こされる自負心について] 日本人は好戦的で名望を求める心が強く、また遠大な事業を企てる傾向のある民族である。日本人は心の中に、或る種の特別な偉大さを有している。日本人は生命を軽蔑しているが、自殺となると、日本ではイギリスやスイスの場合よりも遥かに蔑まれる。日本人の中でも、きわめて古くまた高貴な幾つかの家系の末裔たちには、どこか上品で威厳を感じさせるものがあり、この点で彼らは他の日本人とは区別される。そのような日本人は、すでに幼少のころから自分たちの先祖を称揚しつつ追慕し、それによって自負心を呼び覚まされるのだが、これはごく普通のことである。日本人は教育によって、勇猛かつ大胆な精神を幼児の柔軟な魂に植えつけようとする。日本人の子供は、生まれ落ちてすぐに戦闘や戦勝の歌を聴かされる。学校へ通うようになると、子供は日本の英雄たちの著作や、覚悟の死を選んだ先祖たちの物語を書き写さなくてはならない。[以下、省

略]

〔第17章 眞の優越性を目指した民族的自負心の有する長所と短所とについて〕ユダヤ人はかつて、彼らの祖国にこだわるあまり、友人に対する人間としての義務さえ実行しないほどだった。たとえごくわずかでもオランダ人に敬意や友好の情を示すような日本人は、他の日本人から破廉恥漢、すなわち祖国の敵と見なされる。というのも、そのような日本人は、日本人でない人間をすべて排して自分の祖国だけを愛している、とは言えないからである。たとえほんのわずかでも異人に好意を感じるならば、それは日本の国益にもそぐわず、皇帝の御意にもかなわず、日本の神々の意志にもふさわしくなく、また、日本人の良心を促進することにもならない、と日本人は信じている。この点で日本人は、旧約のユダヤ人に似ていなくもない。〔以下、省略〕

〔訳注〕出典：Johann Georg Zimmermann, *Von dem Nationalstolze*. Neue durchaus verb. Aufl., Wien 1766 (<sup>1</sup>1758).

## V. ヘルダーの人間学 - 歴史哲学における 日本への関心 〔翻訳と注解：寺田 俊郎〕

### 1. 『人間の魂の認識と感覚について』（1774）

【解題】ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744–1803）は、この論文をベルリン・アカデミーの懸賞問題への解答として構想した。

ヘルダーはすでに『世界形成の普遍史』（*Universalgeschichte der Bildung der Welt*, 1766）の中で「中国と日本の政治」を扱っていたが、その著作の計画が初めて表明されたのは、ケーニヒスベルクから海路でナントに向かう旅の日記、すなわち『1769年の我が旅日記』（*Journal meiner Reise im Jahr 1769*）においてである。この日記は生前には出版されなかったが、ヘルダーの個人的な記録であると同時に、「シュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）」の文献資料でもある。その日記の中でヘルダーは、人間史の構想を中心に据えた思

想を展開している。すなわち、「今日に至るまでの歴史の起源、進展、変遷について文献を研究するには、何と壮大な歴史だろう。〔中略〕人類、人間精神、世界の文化を、あらゆる空間、時間、民族、諸力、融合、形態にわたって主題とする仕事は、どのようなものだろう。〔中略〕フランスの世紀、イギリス、オランダ、ドイツの情勢、中国と日本の政治、新世界の自然学、アメリカの習俗、など。——大きなテーマ：すべてのことが生起するまでは、人類は過ぎ去りはしない。啓蒙の霊が世界に限なく行き渡るまでは。世界形成の普遍史」と宣言されている。カピッツァによれば〔*JiE*, II-598〕、ド・ギーニュ（de Guignes 1721–1800、フランスの中国・東洋学者で、ルーブル美術館の古美術管理官）をはじめとする名前が見られることから、ヘルダーがすでにこの分野の関連文献に精通していたことが窺える。

ところで、ヘルダーは後に『人間史の哲学』（*Philosophie der Geschichte der Menschheit*）でもさらに展開されることになるこの「人類の普遍史」というテーマを、本作品でも改めて取り上げている。この作品は1774年にアカデミーに送られたが、賞に輝くことなく、1778年に加筆のうえ出版された。そこには、中国人と日本人の異なった生き方や感じ方に関する叙述が含まれているが、カピッツァによれば〔*JiE*, II-616〕、その典拠を特定するのは難しい。両民族の違いは、すでに最も早い時期の報告でも強調されており、しかもヘルダーは多読であつたので、そうした叙述の直接の典拠を明らかにするのは困難なのである。だが、例えば、ヘルダーがフランス人のイエズス会士デュ・アルド（Du Halde 1674–1743）の中国書（『中国帝国全誌』）と推測される。同書には多数の翻訳や翻案があり、当時の哲学や思想に影響を与えた。）を所蔵していたことは「ヘルダー蔵書目録」（*Bibliotheca Herderiana*, Weimar 1804）から明らかである。

人類はさまざまな集団、すなわち民族、都市、家族に分かれるが、それらはみな必ず1つの感情の領域、1つの風土、1つの生活様式の中で親密に生きている。1つの先祖の息子達であり、同じような心身のつくりであり、したがってまた、似かよった考え方をする。アラビア人とグリーンランド人の、柔和なアメリカ・インディアンと冷酷なエスキモーの住む世界は、どれほど違うことであろう。彼らの体格、食物、教育、彼らから受ける第一印象、そして彼らの感情の内的構造は、どれほど違うことであろう。その感情の構造の上

に、思想の構造と、それら2つの現れである言語が成立する。岩石、峡谷、地震に囲まれた荒れた土地や、恐ろしい海や火山のそばに住む民族の宗教と道徳とは、常に荒々しく驚嘆すべきものであることが分かっているが、これは、彼らの感情とそれに適合した思考の現れである。日本には、隣の中国と比べて、何という生き方と感じ方とがあることだろう。日本の考え方は元々その天と地、その生き方と統治、その山と海の娘であり証人である。それは、中国の言語と教えが窮屈な習俗と規則の娘であるのと、同じことである。無為の東洋人は、ヨーロッパ人が発見と知識を求めて旅をするのがどういうことか、理解できないのである。

〔以下、省略〕

〔訳注〕出典：Johann Gottfried Herder, *Uebers Erkennen und Empfinden in der menschlichen Seele*, in: *Sämtliche Werke*, hrsg. von B. Suphan, Bd. 8.

## 2. 『人間史の哲学の構想』(1784/91)

【解題】ヘルダーは1774年、匿名で『人間形成のためのもう1つの歴史哲学——今世紀の多くへの寄与』(*Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit. Beytrag zu vielen Beyträgen des Jahrhunderts*, 1774) という著作を公表した。これはヘルダー最初の歴史哲学の著作である。その表題の意味するところは、「これもまた1つの歴史哲学」ということであり、直線的な人類の進歩の頂点にあると自認していた合理主義的な啓蒙の歴史観に対して、数ある歴史観の1つに過ぎないとはいえ、1つの代案を対置するというわけである。ところで、カピッツァによれば〔JiE, II-702〕。ヘルダーの考える歴史の担い手は、神の隠された救済計画を敬虔に信じることによつてのみありうべき完成に到達できる個々の人間であり、「啓蒙」はヘルダー自身の時代に縛られたものではなく、あらゆる文化と時代を通じて達成されるのである。すでに前出の『我が旅日記』に萌芽の見られるこの考えは、『構想』においてさらに発展していくことになる。

だがヘルダーは、日本に関する精緻な資料研究を行うことはできなかったようである。同じくカピッツァによれば〔JiE, II-702〕、彼がもっぱら参考にした文献は、ケンペルからの抜粋を含む『水陸旅行双書』(本編の第3節を参照)とシャルルヴォア(本編の第3節、注(\*)を参照)の著作である。この

『構想』における日本の扱いは、文化の複数性から発して諸民族からなる大家族に至るというヘルダーの歴史哲学の構想が説得力をもつだけに、期待はずれのものであって、ヘルダーの人間学が総じて情熱的であるのとは著しい対照をなしている、とカピッツァは否定的な評価をしている。

〔第2部、第6巻〕〔II. 地球の背骨であるアジア地方の諸民族の成り立ち〕中国人は、地方や生活様式の著しい相違はあるものの、明らかに東方型の顔をしているが、それはモンゴル高原で最も際立っている。そのモンゴルの幅の広い顔、小さくて黒い目、丸い鼻、薄い髭が、他の国ではもっとやさしい丸みを帯びた形態になって、その風土に独特のものになっているのである。そして中国人の趣味が不体裁な諸器官の結果であるのは、中国の統治形態と教えとが専制と野蛮をともになっているのとまったく同じであるように思われる。日本人は中国文化に属する1民族であるが、おそらくモンゴル系であり、ほとんど例外なく発育が悪く、大きな頭、小さな目、丸い鼻、扁平な頬で、ほとんど髭はなく、脚はたいいてい曲がっている。その統治形態と教えは暴力的な強制に満ちており、ただこの国にだけすっかり適合している。専制の第3の様式はチベットを支配している。チベットの宗教的な勤行は、遙か未開の草原地方にまで及んでいる。

〔同、第8巻〕〔II. 人間の想像力はどこでも有機的で風土的であるが、どこでも伝統によって導かれている〕我々の地球を囲んで実在する虚像の国ともいうべきこうした想像の王国を遍歴する気のある人がいるとすれば、私はその人に冷静な観察の精神を望むであろう。その精神とは、まず、〔民族的な特徴の〕一致と血統の仮説にとらわれないで、どこでもまったく自分の土地にいるようにし、また隣人のいかなる愚かさをも教訓に富んだものにするを知っている精神である。私が特に記さなければならないのは、夢想する民族の生ける幻の国から得られた、若干の一般的な知見である。

1. このような国では、どこでも気候と民族の特徴が見られる。グリーンランドの神話をインドの神話と、ラップランドの神話を日本の神話と、ペルーの神話を黒人の神話と組み合わせてみるがよい。創作する魂の完全な地理学になる。パラモン教の祭司は、アイスラ



ンドのヴォルスバ伝説を読み聞かされても、ほとんど何も思い描くことができないであろう。同じように、アイスランド人もヴェーダを訳の分らないものと思うであろう。どの民族にもそれぞれの表象様式が刻みつけられているが、それはその民族に固有のもので、その天と地に和しており、その生活様式から発して祖先から代々受け継がれてきたものであるだけに、いっそう深く刻みつけられているのである。外国人が最も驚くとき、彼らは最もはっきり理解していると信じている。外国人が笑うとき、彼らはこのうえなく真面目である。インド人によれば、人間の運命は脳に書き記されており、その微細な皺は宿命の書の判読できない文字を表している。ある民族のきわめて恣意的な概念や憶見は、往々にしてこのような絵空事、心身に固く結びついた空想に織り込まれている図柄なのである。

2. それはなぜであるか。これら各々の人間の群が自ら神話を発明し、それで神話をいわば所有物のように愛しているのであるか。そうではない。彼らは神話の中の何事も発明してはいない。それを継承したのである。彼らが独自の熟慮によってそれを完成したとすれば、独自の熟慮によってそれを漸次、改善することもできるであろう。しかし、この場合はそうではない。

〔以下、省略〕

〔Ⅲ. 人類の実践的悟性は、どこでも生活様式の要求のもとで発達した。だが、それはどこでも民族の精神の精華、伝統と習慣の子である〕世間では、地球上の民族を狩猟民、漁撈民、遊牧民、農耕民に区分し、この区分に従って、その文化の中での身分のみならずその文化そのものを、あれこれの生活様式の必然的帰結として規定するのが慣例である。まずこの生活様式が自ずからはっきり規定されるならば、結構であろう。しかし、生活様式はほとんど地方ごとに異なり、多くは非常に錯綜していて、純粋な分類を適用するのがきわめて難しくなる。クジラを射ち、トナカイを狩り、アザラシを屠るグリーンランド人は漁撈民であり、狩猟民である。だが、黒人が魚を捕ったり、アンデスの荒野のアラウカ人が狩りをするのとはまったく違う仕方によっている。ベドウィンとモンゴル人、ラップ人とペルー人は遊牧民であるが、ベドウィンがラクダを、モンゴル人がウマを、ラップ人がトナカイを、ペルー

人がアルパカとラマを牧養する様子は、それぞれいかに異なっていることであろうか。ウイダの農民と日本の農民は、イギリス人と中国人が商売において異なるのと同じく、似ても似つかないのである。

〔第3部、第11巻〕〔Ⅱ. コーチ・シナ、トンキン、ラオス、朝鮮、東タタール、日本〕人類の歴史を見れば、ある国が卓越した文化の段階に達すると隣接地域一円にも影響を及ぼした、ということは否定できない。それゆえまた、中国民族も、非好戦的でその政治体制は内向的であったにせよ、やはり周辺の広い領域にその影響を及ぼしたのである。〔以下、省略〕

そうした中で、中国人が自らの精励の最大の好敵手を育てた島国、それが日本である。日本人はかつて未開人であり、その好戦的で勇敢な性格からして、じつに剛健で気性の激しい未開人であった。日本人が文字と学問、手工業と技芸を学んだその民族〔中国人〕との近隣関係と交流を通じて、日本人は、多くの点で中国に匹敵し、あるいはそれを凌駕する1つの国家を形成したのである。もともと、この国民の性格からして、その政治は宗教と同様いっそう厳格で苛酷であり、また、ヨーロッパで急速に生じているような洗練された学問への進歩は、中国と同様、日本でも考えられない。しかし、この国の知識と風習、農耕や実用技術における精励、商業と海運、その国家体制の生硬な壮麗さと専制的な秩序ですら、打ち消しがたい文化の段階に達しているとすれば、この堂々たる日本は中国人のおかげでそれに到達したのである。この民族の年代記は、未開人であった日本人が中国に渡来し、未開の島国に適合して独自に成長し、〔やがて〕中国から離れて発展した時代を記してもいる。しかし、日本人の文化を支えているあらゆるもの、いや諸技芸の改作それ自体に、中国が起源であることが明らかに認められるのである。

さて、この民族がさらに進んで、向いの西海岸に広がるアメリカの開化した2つ国のうち、一方の国の文化に影響を与えたかどうかは、判定するのが難しい。開化した民族が西側からアメリカに到達したとするならば、中国人か日本人の他にはまずありえないであろう。中国の歴史が、その政治体制に従って、きわめて中国流に編集されねばならなかったのは、とにかく残念なことである。それはあらゆる発明を歴代の王に帰

している。それは自らの国を越えた世界を忘れており、王国の歴史としては、残念ながら、教示に富んだ人類史とはとてもいえない。

〔同、第13巻〕1つの国を望み通りに知ることができないまま立ち去る彷徨い人のように、そうした未練の思いで、私はアジアを後にする。我々がアジアについて知っていることは何と少ないことか。それも、大抵は何と最近の時代の、何と不確かな筋の情報であることか。東アジアは、宗教家や政治家を通じて最近になって初めて我々の知るようになったばかりで、ヨーロッパの学者によって部分的に混乱させられているので、我々はその大部分をまだお伽の国であるかのように眺めているのである。〔以下、省略〕

〔I. ギリシャの地勢と住民〕イギリスをドイツと比較してみるがよい。イギリス人はドイツ人〔と同じ〕である。確かに、ごく最近にまで、ドイツ人は最も重要な事柄においてイギリス人の模範になってきた。しかし、島国であるイギリスは早い時代から他国よりも普遍的精神を働かせるようになったので、この精神はこの島国において他国よりも鍛えられ、困窮した内陸の国には望むべくもない堅固さに容易に達することができた。デンマーク諸島、オランダや北ドイツはもちろんのこと、イタリア、スペイン、フランスの海岸地方についても、ヨーロッパのスラヴスキタイ諸国などの内陸地方、すなわちロシア、ポーランド、ハンガリーなどと比較すれば、同様の事情に気づくだろう。優れた地勢に恵まれた島、半島、海岸では、大陸の国の一律で古い法制の圧迫の下では生じ得なかったような、努力の精神と自由な文化が生じたということ、旅行者はあらゆる海に面した地方で見てきたのである。〔注1〕〔以下、省略〕

〔注1〕マレー人やアジアの島々の住民と大陸の国を比較してみるがよい。さらに日本をも中国と、クリル諸島やフックス島の住民をモンゴル人と対比してみるがよい。ホアン・フェルナンデス諸島、ソコトラ島、イースター島、ビロン島、モルディヴ諸島、その他。

〔同、第15巻〕〔II. 自然のあらゆる破壊力は、時間の経過とともに、保存力に屈服するだけでなく、それ自

体も最終的には全体の形成に役立たねばならない〕アメリカの未開人ですら、自らの経国の術をもっている。しかし、それは何と限られたものであることか。というのも、それは個々の種族には利益をもたらすが、民族全体を没落から守れないからである。多くの小民族が互いに衝突し、消耗してしまった。他の小民族は衰退し、ヨーロッパ人の天然痘、ブランデー、所有欲などとの悲惨な戦いによって、その多くもおそらく同様の運命を辿るであろう。アジアやヨーロッパにおいて国家の体制づくりが技巧的になればなるほど、国家はその分、それ自体で確立し、他国との密な共同関係の基礎を固め、その結果、他国なくして崩壊することはありえないのである。中国もそうであるし、日本もそうである。自らの深いところに基礎をもつ古い建造物。ギリシャの体制はいつそう技巧的であり、その卓越した共和国は、政治的な均衡を求めて、数世紀の永きにわたって戦ったのである。共通の危機が彼らを一致させ、その一致が完全なものだったならば、この強壮な民族はピリポスとローマ人に対して、かつてダリウスやクセルクセスに打ち勝ったように、立派に対抗できたであろう。近隣のあらゆる民族が拙劣な経国の術しかもたなかったというだけで、ローマは有利になった。それらの民族は別個に攻撃され、別個に征服されたのである。ローマも同様の運命を辿った。その経国と戦争の術とが衰えたのである。ユダヤやエジプトも同様の運命であった。国家がよく整っているならば、いかなる民族も、たとえ敗北したとしても没落はしない。それは中国自身が、そのあらゆる失敗によって実証しているとおりである。

〔第1部と第2部への補遺〔…〕、第6巻〕〔VII. 前述の民族の絵図に基づく認識、推論、願望〕諸民族の正確な描写は、残念ながら、非常に新しい発明なのである！ というのも、誰が例えばブリーの絵図や、古い木版画や銅版画を頼りにできるであろうか。それらは明らかに真実の精確さを素通りして、驚異的なものや珍奇なものか美しいものを求めたからである。そして、嫌になるほど繰り返された民族の記述は、たいいてい嘘八百の古い書物に基づいており、そのような書物は無数に列挙することができる。フォルスターが注意しているように、ホッジのタヒチの絵画でさえ美化されて

いるとすれば、誰がブルイン（ル・ブラン）やその他の、ありのままの真実を求めることがいまより遥かに少なかった時代の人々を、信用することができるであろうか。美化された動物学はその目的に反している。美化された人間学も同じことである。

2. また、衣服や服装といったものではなく、身体の形態、すなわち真実がこのような描写の主要部分になりうる。ゲオルグのロシア民族の叙述はとても貴重なものであるが、男性的な趣味をもった読者の誰が、その多彩な衣服〔の叙述〕に傾注された努力が、肢体の正確な比率に傾注されるよう願わないであろうか。クックの最初の旅行におけるニュージーランド人や、第3の旅行におけるウナラスカの首領のような人物が、もっと大勢いてくれたならばどうであろうか（ゲオルク・フォルスターが自分の旅行を通じて人間の描写をしていていないのは、あまりにも控え目である）。

〔その場合、〕地球上のほぼすべての民族に接近したり、あるいは彼らを手中に収めてもいる商業国は、中国人や日本人、インド人や東方の諸島の民、さまざまな種族の黒人、さまざまな民族や地方出身のアメリカ人の真実の姿を記述して我々に示すために、自分たちの暇な時間を幾らかは活用することであろう。そうすれば我々は、地球の生きた観相学と人間学を手に入れることができるであろう。〔以下、省略〕

【訳注】出典：Ders., *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*. in: *Sämtliche Werke*, hrsg. von B. Suphan, Berlin 1877-1913, Bd. 13/14. なお、本稿の訳出に当っては、その全訳である鼓常良訳『人類史論』（白水社、1948/49）を参照した。また、解題で言及した『人間形成のためのもう1つの歴史哲学』の全訳が、登張正實責任編集『ヘルダー・ゲーテ』（『世界の名著』第38巻、中央公論社、1979）に『人間性形成のための歴史哲学異説』として収められている。この訳文と解説も参照した。

## 【関連文献の紹介】

〔担当：寺田 俊郎〕

Werner Schneiders (Hrsg.), *Lexikon der Aufklärung: Deutschland und Europa*, München 1995, 462 S.

〔W・シュナイダース編『啓蒙主義辞典——ドイツとヨーロッパ』、ミュンヘン、1995、462頁〕

細々とカントを読んできたが、いつもテキストの読みに汲々としている私は、カントの使う概念の歴史的背景を十分に願慮してきたとはとてもいえない。それは自覚していたし、もっと勉強しなければと感じていたが、この辞典の *Autonomie* (自律), *Gesetzgebung* (立法), *Klugheit* (伶俐), *Mündigkeit/Emanzipation* (成年/解放), *Recht und Moral* (法・権利と道徳) など、カントに縁の深い項目を読んで改めてそれを痛感した。カントへの／からの影響というカント中心の記述ではなく、それぞれの概念が当然もっている歴史的・社会的な広がりの中に置き直して見ると、とても新鮮な印象を受ける。私にとって有り難くもあり、面白くもある辞典である。

編者の前書きには次のように述べられている。「啓蒙」を諸問題と戦う万能薬と見る者もあれば、近代の諸悪の根源と見る者もある。だが、啓蒙をめぐって2つに分かれる議論を有意義なものにするためには、啓蒙を、すなわち、自ら「啓蒙の時代」と称した時代を根本的に知らねばならないのである。この辞典の狙いは、啓蒙の時代の入門書として、また参考書として役立つことであり、そのための基本方針は次の2つである。第1に、ドイツの啓蒙〔主義〕に焦点を合わせ、その背景としてのヨーロッパの啓蒙もできるだけ含める。第2に、啓蒙の叙述は思想史にも社会史にも還元することはできないので、実学や文化現象もできるだけとり入れる。

さらに前書きには、多くの短い記載事項ではなく内容のある項目を提示し、専門用語は大幅に放棄し、学術的な注は原則として放棄する、と述べられている。まさにそのとおりで、項目の1つ1つが充実しかつ簡潔な読み物になっている。例えば、項目「啓蒙 (*Aufklärung*)」の内容を見てみよう。この項目はちょうど2ページで約700語であるが、他の項目もほとんどが1から2ページの分量である。以下、この項目の評者による要約である。

“*Aufklärung*”はドイツ語独特の造語であって、動詞“*aufklären*”（〔空が〕晴れる）という天気に関する自動詞的ないし再帰動詞的用法に発するが、遅くとも17世紀には、他動詞的でメタファー的な用法が表れ、それがやがて「悟性」に関して用いられるようになった。名詞としての用法は、1691年の「悟性の啓蒙 (*Aufklärung des Verstandes*)」が初出だと思われる。それ以前にも、形容詞の「啓蒙された (*aufgeklärt*)」

は、ライプニッツが用いたフランス語の“éclairé”と同じく、すでに用いられていた。その後1世紀かけて流行したこの語は多義的であり、啓蒙運動への批判はそうした啓蒙の定義を問うことから始まった。フランスでは18世紀は「光の世紀 (siècle des lumières)」, 啓蒙は単に「光 (lumières)」と呼ばれるが、これは中世以来の「光」のメタファーに由来する。このように、思想運動としての啓蒙それ自体を表す概念はなく、啓蒙を推進する人々も「啓蒙主義者」とは呼ばれていなかったことから、フランスの啓蒙運動は自覚的ではなかったようにすら見える。これは、17世紀後半には「啓蒙する (éclairer)」という語が用いられ、1700年頃にはすでに「啓蒙された時代 (siècle éclairé)」という概念が成立していただけに、いっそう驚くべきことである。それに対してイギリスでは、「光」という啓蒙のメタファーはほとんど役割を演じず、むしろ19世紀になって初めて、ドイツ語とのアナロジーで “the age of enlightenment” という概念が成立したのである。このように、「啓蒙」はドイツ語から始まり、ヨーロッパ各国でのさまざまな差異を標準化する概念であって、あくまでも制限つきで用いられなければならない。だが、類似の諸問題（偏見や迷信などと闘い、宗教や社会などを批判し、改革すること）に関わり、その解決には明晰判明な認識と洞察を拡張する必要があった限りで、この概念が妥当するのである。

さて、本書では「日本 (Japan)」も項目として取り上げられている（担当は高橋輝暁）。それによれば、日本は、16から17世紀にイエズス会、17世紀以降は東インド会社によってヨーロッパに知られるようになったが、特にケンペルの影響が大きかった。17世紀からは漆器、着物、陶磁器などの工芸品を通じて、日本像が形成された。また、迷信と闘う中で日本の宗教に関心が集まり、バールは、日本の宗教に迷信の実例と宗教的寛容の精神を見出し、ディドロやヴォルテールは儒教に理性道徳の理念を見たのである。レッシングも日本人の精神を題材とする劇作を試みたり、モンテスキューは儒教と日本の法律との関係について見解を述べている。そのモンテスキューは日本を専制国家と見なしたが、クラウディウスは合理主義的な儒教によって律せられた領主、つまり啓蒙された領主を想像したのである。このように、ヨーロッパの日本像はあるときはユートピアとして、あるときはヨーロッパの欠陥に対する当て擦りとして機能したのである。こうしたケンペルに由来する肯定的な日本像は永く受け継がれたが、西洋が中国や日本よりも文化的に優位にあるという考えも一般的であった。他方、鎖国政策についても議論があって、例

えばカントは、中国や日本の鎖国を擁護した。そしてケンペル以降、(同じく商館医であった) ツーンベリやシーボルトの著作によって、日本に関する知見が広められることになる。

ちなみに、本書の執筆者一覧によれば、大多数を占めるドイツ語圏の執筆者以外にも、欧米各国から若干の研究者が参加している。なお、編者のW・シュナイダースはミュンスタール大学の哲学教授で、本書と同時期の著作に、*Das Zeitalter der Aufklärung*, München 1997 がある。

## 【謝辞】

この共同研究の成果を公表する機会を与えて下さった本研究雑誌の編集委員会諸先生に対して、この場を借りて心より感謝を申し上げます。

また、この共同研究に参画して下さい下さった諸姉兄には、成果の公表が大幅に遅延したことお詫び申し上げますと共に、これまでの真摯な努力に敬意を表します。

(宮島光志)